

鳩摩羅什における「衆生」觀

塩 入 法 道

一 小品系般若經

① 支婁迦讖訳『道行般若經』(一七九年頃)

a 「於拘翼意云何。何所法中作是教人本所生。釈提桓因言。無有法作是教者。亦無法作是教住置。設有有出者但字耳。設有住止者但字耳。但以字字著言耳。有所住止処但字耳。了無所有。但以字字著言耳。人復人所。本末空無所有。須菩提言。於拘翼意云何。人可得見不。釈提桓因言。人不可得見。須菩提言。拘翼。何所有作意者。何所人底。正使恒薩阿竭阿羅呵三耶三仏。寿如恒辺沙劫尽度人。人展転自相度。其所生者寧有断絶時不。釈提桓因言。無有断絶時。何以故。人無有尽時。須菩提言。人無有底。般若波羅蜜無底。菩薩学当作是了。当作是知。行般若波羅蜜法如是」

b 「復置是三千天下七宝塔。拘翼。若三千大国土中薩和薩。皆使得人道。了了皆作人已。令人人作七宝塔。是輩人尺形寿供養。持諸伎楽諸華諸搗香諸沢香諸雜香若干百種香諸絵諸蓋諸幡。復持天華天搗香天沢香天雜香天絵天蓋天幡。如是等薩和薩。乃三千大国土中薩和薩。悉起是七宝塔。皆是伎楽供養。云何拘翼。其功德福祐

「衆生」という語は仏敎用語としてばかりでなく、一般にも広く使用されるが、その意味するところを的確に定義することは、そう簡単ではない。衆生義の探求の一環として、本小論では、羅什の翻訳經典とそれ以前の翻訳を比較し、衆生の語が中国仏敎にどのように定着したかを考察したい。結論的になるが、羅什の翻訳においてこの語が決定的に定着したと思えるのである。後に玄奘が「有情」の語を使い、兩者併用されるようになったが、やはり衆生の語の方がなまじまされてゐる。衆生の語は漢訳經典で最も初期の安世高訳には見あたらず、やや下って支婁迦讖訳『般舟三昧經』⁽¹⁾、敎仏調訳『法鏡經』⁽²⁾、支曜訳『成具光明定經』⁽³⁾などにもわずかに散見できるのみである。なお漢籍では『礼記』や『莊子』⁽⁴⁾⁽⁵⁾に若干の例を見ることができる。

以下、比較検討しやすいように、羅什訳の經典と、彼以前の異訳のあるものを選んで引用してみた。

寧多不。積提桓因言。作是供養者。其福祐功德甚多甚多天中天。⁽⁷⁾
c 「仏言。云何須善提。閻浮利人民四面蜎飛蠕動悉令人道。各各得人道已。皆令求阿耨多羅三耶三善。以發意索仏道。各各尽寿作布施。持是布施施与作阿耨多羅三耶三善。」⁽⁸⁾

②支謙訳『大明度経』(二八八年頃)

a 「云何於釈意。何所法中名為人。於法中不見有名為人者。何以故不。見有所從來處。所以者何。人本来皆空無所有故。設使有來者有住止者但名耳。何以故。於名字中学有所有不。曰不也。善業曰。用名字無所有故。無作我者。是故人無底。正使如来無所著正真道最正覺寿如恒沙劫。口説名人人。復人寧有生滅者不。釈言。一切無生滅者。善業言。所以者何。用一切淨故。無所起名不可得。是故人無底。明度無極名無底。当作是知。」⁽⁹⁾

b 「若三千大千国土衆生悉得人道。各作七宝塔。以妓衆衆之。復過是如恒迦沙仏利人。人起七宝塔供養劫復劫。都是欲界中諸妓衆花香絵蓋皆具如上。所説其福德益多不。対曰。甚多天中天。」⁽¹⁰⁾

c 「仏言。云何四天下群生都獲為人。当求無上正真。發意索仏道各尽寿布施与無上正真道。」⁽¹¹⁾

③羅什訳『小品般若経』(四〇八年頃)

a 「衆生義即是法義。於意云何。所言衆生。衆生有何義。積提桓因言。衆生非法義。亦非非法義。但有假名。是名字無本無因。強為立名名為衆生。須善提言。於意云何。此中実有衆生可説可示不。不也。須善提言。憍尸迦。若衆生不可説不可示。云何言衆生無迦般若波羅蜜無迦。憍尸迦。若如来住寿如恒河沙劫。説言衆生衆生

鳩摩羅什における「衆生」観(塩入)

実衆生滅不。積提桓因言不也。何以故。衆生従本已來常清淨故。憍尸迦。是故当知衆生無迦般若波羅蜜無迦。」⁽¹²⁾

b 「假令三千大千世界所有衆生。一時皆得人身。是一人起七宝塔。尽其形寿。以一切好華名香幢幡伎樂歌舞。供養是塔。憍尸迦。於意云何。是人以是因縁故。得福多不。甚多世尊。」⁽¹³⁾

c 「仏告須善提。於意云何。假令閻浮提所有衆生。一時皆得人身。發阿耨多羅三藐三善提心。發心已尽形布施。以是布施。迴向阿耨多羅三藐三善提。」⁽¹⁴⁾

(ここで引用した冒頭のアルファベットは、それぞれの經典の同一箇所を示す。以下も同じ。)まずaの部分は支謙、支謙ともに「人」と訳しているが、羅什はすべて「衆生」としている。bとcは似たような内容のところであるが、支謙は「薩和薩」(sarvasatta)の訛音か)「人道」「人」「人民」「蜎飛蠕動」の語を使い、支謙は「衆生」「人道」「人」「群生」などを用いている。羅什訳においては、「衆生」が主に使われているが、「人身」「人」の語もある。ここでは衆生がいったん人間となつて塔を作る、という經典内容であるので、羅什としても衆生と人身を区別せざるを得なかったようである。後世の写本である梵本『八千頌般若』では、aの部分はすべてsattaであり、bのところは、羅什訳で衆生とあるのはsatta、人身とあるのはmanuṣyakaṃ āmahāvān……(人間の身体)となつている。なお支謙訳にある「蜎飛蠕動」というのは、

漢籍にも見られ、⁽¹⁶⁾ 羅什以前の翻訳には時々現われる語である。sattva の訳語としてはむしろ具体的で分かりやすい訳とも思える。

二 維摩經

① 支謙訳『維摩經』（三三〇年頃）

a 「仏言童子。蚊行喘息人物之土則是菩薩仏国。所以者何。菩薩欲教化衆生。是故授取仏国。欲使仏国人民尽奉法律故取仏国。欲使仏国人民入仏上智故取仏国。欲使仏国人民見聖典之事而以発意故取仏国。所以者何。欲導利一切人民令生仏国。譬如有人欲度空中造立宮室終不能成。如是童子。菩薩欲度人民故願取仏国。願取仏国者非於空也。」⁽¹⁷⁾

b 「観人物品第七 於是文殊師利問維摩詰言。菩薩何以觀察人物。答曰。譬如幻者見幻事相。菩薩觀人物為若此。」⁽¹⁸⁾

② 羅什訳『維摩經』（四〇六年頃）

a 「仏言。宝積。衆生之類是菩薩仏土。所以者何。菩薩隨所化衆生而取仏土。隨所調伏衆生而取仏土。隨諸衆生心以何国入仏智慧而取仏土。隨諸衆生心以何国起菩薩根而取仏土。所以者何。菩薩取於淨国。皆為饒益諸衆生故。譬如有人欲於空地造立宮室隨意無礙。若於虚空終不能成。菩薩如是。為成就衆生故願取仏国。願取仏国者非於空也。」⁽¹⁹⁾

b 「観衆生品第七 尔時文殊師利問維摩詰言。菩薩云何觀於衆生。維摩詰言。譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生為若此。」⁽²⁰⁾

このように支謙訳では訳語にずいぶんバラツキがあり、統一がとれていないが、羅什訳では、やはりすべて「衆生」としている。支謙訳の不統一は、原梵本の語が異っていたからというよりも、おそらくすべて sattva とあったのを、苦心して様々に訳したと見るべきであろう。チャット訳は sans-can Ⅱ sattva とある。

三 法華經

① 竺法護訳『正法華經』（二八六年頃）

a 「於此衆会有無央數億百千載蚊行喘息蜎蠕動群生之類。曾見過仏知殖衆徳。聞仏所説。悉当信樂受持奉行。」⁽²¹⁾

b 「正覺所興世嗟歎一事為大示現皆出一原。以用衆生望想果応勸助此類出現千世。黎元望想希求仏慧出現千世。蒸庶望想如来宝決出現千世。……群生……民庶……衆生……群生……」⁽²²⁾

② 羅什訳『妙法華經』（四〇六年頃）

a 「是會無數百千万億阿僧祇衆生。曾見諸仏。諸根猛利智慧明了。聞仏所説則能敬信。」⁽²³⁾

b 「云何名諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世。諸仏世尊。欲令衆生開仏知見使得清淨故出現於世。欲示衆生仏之知見故出物於世。欲令衆生悟仏知見故出現於世。……衆生……衆生（以下すべて衆生）」⁽²⁴⁾

梵本では a の部分は bahūni prāṇi-satāni bahūni prāṇi-sa-haṣṭrāni……（多くの生きもの）となっており、sattva ではなく

い。bの部分はすべて *sattva* である。法護はaの部分は原文の意味を分かりやすく「岐行喘息云々」と訳し、bのところは修辭上の観点からか同意語を駆使したように見える。羅什はaのところも衆生の語で押し通してしまつたごとくである。

以上若干の漢訳經典を通して、衆生の語の翻訳を見てきた。原梵本が無いので断定はできないが、羅什以前では、おそらく *sattva* の語を訳するにかなりの苦心、とまどいがあったように見える。生物一般なのか人間なのか、社会的人民なのか法としての衆生なるか、と言うような問題があると思える。羅什は、經典を誦誦する場合の流麗のために衆生の語に統一したところもあるが、むしろ、「蜻飛蠕動」とか「人物」「人民」では納りきらない概念を「衆生」に含め、字義以上の意味を持つ用語として中国仏教に定着させたと考えるべきであろう。なお、紙面の関係で引用しなかったが、無羅叉訳の『放光般若經』(一九一年頃)などにも衆生の語が多見され、羅什以前でも衆生の語はある程度は一般的であつたことが知られる。

- (1) 例えば大正一三・九〇九b、九一一b。
- (2) 大正一二・一五b↖c、一八b↖c。
- (3) 大正一五・四五五c。
- (4) 札記・祭義。

鳩摩羅什における「衆生」観(塩 入)

- (5) 莊子・徳充符。
 - (6) 大正八・四三〇c。
 - (7) 同、四三三a。
 - (8) 同、四六二b。
 - (9) 同、四八三b。
 - (10) 同、四八四b。
 - (11) 同、四九九c。
 - (12) 同、五四一c。
 - (13) 同、五四三a。
 - (14) 同、五七二a。
 - (15) 荻原版、a||一七九〜一八〇頁。b||二二六頁。
 - (16) 例えば淮南子・原道訓、傲真訓。抱朴子・仁明等に見える。
 - (17) 大正一四・五二〇a。
 - (18) 同、五二八a。
 - (19) 同、五三八a。
 - (20) 同、五四六a。
 - (21) 大正九・六九a。
 - (22) 同、六九b↖c。
 - (23) 同、六c。
 - (24) 同、七a。
- 〈キーワード〉 衆生、羅什、漢訳語、*sattva*
- (大正大学講師)